

講師質問コース 回答

< 幼児教育分野 >

[講師] 九州産業大学 人間科学部 子ども教育学科 教授 鐘ヶ江 淳一 氏

この度は、「令和6年度 保育士等キャリアアップ研修<幼児教育分野>」をご受講いただきありがとうございました。

「講師への質問受付コース」にご入力いただきましたご質問について、講師からの回答を共有いたします。なお、多数のご質問をいただいたため、多くの方からご質問いただいた内容等を中心に回答いただいております。予め、ご了承いただきますよう、お願い申し上げます。

是非、今後の現場での実践に活かしていただけますと幸いです。

Q 全国で本研修を受講された受講者からの質問内容

A 質問に対しての講師からの回答

■ 幼児との関わり

Q 自分の言葉で嫌だったら気持ちを伝えることができるが、言葉よりも先に、相手に手が出てしまう子がいます。都度、その子には伝えていますが、同じことを何回も繰り返してしまうため、どのような関わり方をすれば、手が出ずに相手に言葉で伝えることができるのでしょうか。

Q 5歳児で自己中心的な振る舞いが多く、自分ができないことなどは初めから挑戦しようとしなない（大泣きで拒否する）、また、集団遊びの際も、鬼になってしまうなど自分にとって不利な状況になると泣きながら遊びから出てしまう子がいます。個別での対応が必要なため、その子につくが、その都度、まわりが落ちつきがない雰囲気になってしまふ。しかし、保育士の数も足りず、活動が中途半端になってしまう事も困っています。どのように対応していったら良いのでしょうか？

Q 0歳児から5歳児が在園する小規模保育園での事なのですが、年中児が子ども同士での関わりというよりも保育者を介しての関わりが多い様に感じます。トラブル等がある際には、保育者に知らせたり、嫌な出来事があると衝動的に手が出てしまったりするので、保育者が仲立ちをしてトラブルを解決するケースがほとんどです。子ども同士で解決したり、遊んだりする様になる為には、わたしたち保育者はどのように立ち回る必要があるのでしょうか？

A こどもが「手が出る」「大泣きで拒否する」「部屋から出ていく」などの行動を起こすのには、必ず、何らかの理由があるはずですが、保育者は、そうした行為そのものに意識がいき、否定的・矯正的な言動をしがちになります。しかし、自分の気持ちをうまく言葉で表現できない幼児期のこどものそうした行動には、必ずメッセージが込められています。幼児期前半には、行為そのものを注意するのではなく、こどもの気持ちに共感し、やりたかった気持ちを代弁してあげることが大切です。幼児期後半には、友だちとトラブルを起こしてしまった理由にじっくりと耳を傾け、信頼できる人に「共感してもらえた」と実感することによって、こどもの心を癒すことができると思います。また、この時期は、こどもたちが自分たちで集団遊びを展開できるようになります。保育者は、こどもの発達過程を理解し、個々のこどもの実態を踏まえながら集団づくりを行うことが重要になります。2024年4月から4、5歳児の保育士の配置基準が「25人に1人」に見直されました。一歩前進だと思いますが、一人ひとりに寄り添った保育を実現するためにも、さらなる改善を求めていくことが大切だと思います。

Q

感情の起伏が激しい子ども、4歳児のA君がいます。そのA君の言動、行動で委縮してしまう子ども、理不尽な姿に反論できず思いを飲み込んでしまう子どもの姿が見られます。双方の思いを聞き伝え合うのですが、我を通そうとするA君。思い通りにいかないと癇癪を起し、物に当たったり、室内から出て行ったりします。受け止めつつ知らせることを繰り返しています。A君の成長、学びにおいて、この関わり方がよいのか悩んでいます。

Q

嫌なことがあると癇癪を起こしたり、思い通りにいかないと怒ってしまい切り替えに時間がかかる子どもが数名います。気持ちを聞いたり、組み取ったりしてなだめたりしますが、なかなかうまく行きません。どのようにして、声掛けや対応をしていけば良いのでしょうか。

A

幼児が気持ちの切り替えをするには、以下のような働きかけが有効です。

- ① 見通しを立てる：スケジュールを作成し、文字や絵で提示する。予定やすることが詰まりすぎないようにする。苦手なことなどは、先に伝えておく。
- ② 終了前に予告する：「あと〇分（回）だよ」と予告する。
- ③ 言葉掛けする：「今は、こんな気持ちなのはわかるけど、次はどんな楽しいことが待っているか考えてみよう」と伝える。「自分で落ち着けたね」と褒める。「楽しいね」「もっと遊びたいね」など、こどもの気持ちを代弁する。
- ④ 切り替えをスムーズにする計画づくり：楽しいことへの切り替えから始める。難易度の低いものから、少しずつ始める。自分で決めたタイミングで終わりにすることができたら、褒める。

Q

保育室の棚に登ったり、保育者の顔を見ながら柵を揺らしたり、と悪い事をわざとして気を引こうとする子どもに、その都度、危ない事やしてほしくない事を伝えたり、さまざまな遊びに誘ったりして気を紛らわせようとするが、何の遊びに誘っても、すぐに飽きて同じ事をしてしまう。他の子どもと比べて、遊びに対する興味や集中が少ない子どもへの配慮として、こういったものがあるのか知りたいです。

Q

3歳児の担任をしているのですが、子ども同士のトラブルが多いです。年齢も低いので、起こりうる事だとは理解していますが、保育者の問いに対して、嘘をついたりする子どももいて困っています。クラスを、子ども達にとって安心できる環境にするよう工夫していますが・・・ご助言いただけたら幸いです。

A

こうした「試し行動」は、「身近な大人の愛情を確かめたい」という愛情確認行動だと考えられます。身近な大人との信頼関係を築き、安心感をもって成長していくための「大切なステップ」です。こどもが「試し行動」と思われる言動をとった時は、良いことといけないうことの線引きをはっきりとさせることが大切です。過剰に叱責したり、こどもの気持ちを真っ向から否定したりせず、こどもの気持ちを受け止めて、愛情をしっかりと伝えるようにしましょう。また、柵に登る、揺らすなどの動きは、こんなことができるよという腕自慢的な気持ちの表れかもしれません。遊びに対する興味や集中が少ないと捉えるだけでなく、園庭の固定遊具などで遊びに誘うと、そのこどもの違った一面が見えてくるかもしれません。

Q

一人一人を大切に保育の中で、集団で何かをする（大きな行事として運動会・発表会）となった時に、したくない子がたくさん出てきています。集団に入れない子が目立つ中、これからの行事はどう進めていけばいいのかなと思うことがよくあります。無理やり参加させるのか、しなくてもいいよと認めるのか、保護者にその姿を本番で見せてよいものか、行事に取り組みながら、今悩んでいる所です。

A

運動会を例にすると、園児募集などの園側の大人の事情が優先され、できた時の見栄えがいい、保護者受けがいい技・運動が選択されがちです。そうした意味で、「運動会までに〇〇ができるようにがんばろう」と大人が決める取り組みだけでなく、こどもたちが自分のペースで友だちや先生と一緒に遊ぶことを通して経験できることもあるはずです。こどもが自らやりたいことを選択する、やりたくなったら挑戦するというスタンスで関わってみてはいいかでしょうか。コロナ禍後の行事の見直しの中で、こどもたちが「自分で決める運動会」を目指した実践も出てきています。さらに、そうしたことを同僚、保護者に伝えながら連携・協力を図っていくことも重要です。運動会の種目選択など、園の方針をすぐに変えることはできないでしょうが、こうしたことを根気強く積み重ねていくことが大事だと思います。

Q

ご両親が外国の方で、子どもが入園し、友達に手が出て困っています。簡単な日本語や英語の単語、絵カード、ジェスチャー、ポケットクで伝えています。他に何か良い方法はないでしょうか？

A

外国籍の幼児が手を出してしまう場合は、園児が言葉を理解できていない可能性があります。その場合は、園児の様子を見守り、安心感を与えることが大切です。外国籍の幼児が保育に慣れるには、次のような点に注意しましょう。

- ・ 日本語をゆっくりハッキリ話す
- ・ 個別に働きかける
- ・ 言葉が理解できず園児の反応が薄かったり、手が出てしまったりする場合は、側にいて様子を見守る
- ・ 担任だけでなく、園全体でサポートする体制を整える

また、多文化保育を展開することで、こどもたちは自然と多文化に慣れていくことができます。

■保護者との関わり

Q

自分のクラスの子どもたちや保護者の様子を見ていても、三間の喪失やスヅケの生活など、現代の子どもたちを取り巻く環境の変化を実感する毎日です。睡眠時間が確保できていない、ふれあいなど関わりの時間が減少しているというような現状もあり、保育者として子どもたちへのアプローチだけでなく、保護者の方へのアプローチや言葉かけなどへの理解も深めたいと思っています。支援や言葉かけの仕方ですら実際に効果があったものや、理解の広がりにつながったものがあれば教えてください。

A

保育者と保護者が連携して生活習慣の乱れに対応するには、定期的なコミュニケーションや情報共有、個別面談などを行うことが大切です。生活習慣の乱れに対応するための連携方法には、次のようなものがあります。定期的なコミュニケーション、保護者参加のイベントや活動、情報共有の仕組みづくり、個別面談の実施、家庭からのメッセージの受け取り、起床・就寝時間の目標の共有。

生活習慣の乱れに対応するにあたっては、保護者と保育者が「こどものために」という共通意識を持って助け合うことが重要です。

■ 幼児教育の環境・保育内容

Q

勤務している園では、園庭が屋上で砂場などがなかったり、ボール遊びができないのですが、そのような環境の保育園も増えていると思います。

代わりになるような遊びも考えたりはしますが、家でもスマホやゲームで、砂を感じられるような公園での遊びなども不足している家庭も増えているなど感じます。こどもたちに、どのような影響があるかなど思ったりしています。先生は、どのようにお考えでしょうか。

A

研修でも指摘した、「三間の喪失」「ス漬の生活」の中で遊びが変質し、心身の健やかな成長に欠かせない要素である、「遊び込む経験」が不足していることが私も気になっています。「遊び込む経験」とは、こどもが主体的に遊びに入り込むような経験を指します。遊び込むことで、自立心や思考力、表現力、社会性、道徳性、協同性などが育ちます。「遊び込む経験」を実現するためには、こどもの気持ちをくみ取り、適切なタイミングで援助をする保育者の関わりが重要になります。さらに、自由に活動を深められる時間や空間、道具などの環境も大切です。保育所・幼稚園・こども園だけではなく、家庭でも可能な範囲で、こどもの「遊び込む経験」を実現する環境づくりを意識することも重要だと思います。

Q

小規模保育園で、年齢毎のクラス分けではなく、「未満児」（0歳児クラス・1～2歳児クラス）「以上児」（3～5歳児）クラスと、大まかなクラス分けをしている。発達面やできること・できないことを考えたりすると、一緒に活動計画をどのように進めていったらよいか悩むことがある。

個々の主体性や思いを汲み、できるだけ各年齢にもバランスよく活動できるように環境設定も考慮しているつもりだが、一緒に活動となるとやはり限度もあり、活動を簡単やつまらなく感じてしまったり、やりたくないといった子ども見られる。職員体制にも余裕がないので、与えられた保育環境の中でどのような保育が最適かをアドバイスいただきたいです。

Q

日々の保育をしていく中で、幼児クラスは異年齢保育を実施しているが、各クラスの子どもの特性からどうしてもクラス別活動をせざるをえない状況にあります。子ども主体、自主性をどのように保育に持っていけば良いのでしょうか。

Q

年齢ごとのクラス分けと縦割り保育について、どのような考えをお持ちか、お聞きしたいです。当園では、現在、年齢ごとのクラスで保育をしていますが、来年度から幼児クラスは縦割りとなります。配慮を要する子が増えてきている中で、気をつける点等あれば教えていただきたいです。

A

同年齢保育では、こどもの発達に近いことから一斉保育で〇歳児用（向け）の保育を行いがちです。しかし、それを「やらない子」や「できない子」が必ず出てきます。保育者はその「できない」が気になり「できる」まで取り組ませようとしますが、うまくいかないことも多いものです。その結果、「しない」「できない」ことを否定的に見てしまい、大人の意図を優先した課題克服型の「させる」保育になってしまい、こどもを追いつめるような保育に行き詰まり感を感じてしまうこととなります。

そうした中で、縦割り保育（異年齢保育）が広がりを見せつつあります。小学校のような時間に区切られた意図性のある保育ではなく、家庭のような生活の必然性に根ざした「幅（ゆとり）」のある保育をめざしてはいかがでしょう。短時間で何かを教え込むのではなく、安心してできる場であることを大切にしたいものです。生活時間にも幅を持たせ、時間できちっと切り替えるのではなく、時間的余裕（幅）を設けます。そうした中で、こどもは余裕を持って安心して遊び込み、自分の気持ちに折り合いをつけ切り替えられる「間」を持てるようになり、保育者も時間に追い立てられずゆったりと関われるように思います。

Q

子どもの主体性を大切にしたいのですが、保育をする中で主体性と放任の線引きが難しくていつも迷ってしまいます。ぜひ、ご助言ください。

Q

幼児教育では、遊びが必要なことは分かったが、どうしても教え込むような指導になってしまうことがあります。より能動的な活動を促すには、どういう工夫や考え方が必要か教えていただきたいです。

A

幼児教育におけるこどもの主体性は、こどもが自分の意思で考え、行動する能力を育むことです。主体性を育むには、こども自身に選ばせたり、決めさせたりする機会を設けたり、こどもの話をよく聞いたりすることが大切です。幼児教育におけるこどもの主体性を育む方法としては、次のようなものがあります。

- ・ こどもに選ばせたり決めさせたりする
- ・ 好奇心を育てる問いかけをする
- ・ こどものチャレンジを温かく見守る
- ・ こどもが興味を持ったことに取り組める環境を整える
- ・ こどもが自分で考えて出した答えを伝えて、初めて「こども主体」とする
- ・ こどもが自分でやりたいことを見つけて、方法を考えて達成していくことを促す
- ・ こどもが自力解決に導けるように援助する

また、こどもが主体的な行動をとれるようにするには、保育者がこどもをよく理解し、こどもの発達段階に応じて環境を設定することも求められます。

Q

クラスの中で育ちに開きがあり、その対応をうまくできずにいます。どちらかに合わせるとどちらかが楽しめていないようで、それとなく育ち別に分けることは良くないと言われました（子どもが感じ取ったり、保護者からの意見が出るため）。担任は一人しかいない中で、一人一人の育ちに寄り添い、遊びを充実させていくにはどうしたら良いのでしょうか。

A

幼児期後半は、こどもたちが自分たちで集団遊びを展開できるようになります。保育者は、こどもの発達過程を理解し、個々のこどもの実態を踏まえながら集団づくりを行うことが重要になります。その際、個々のこどもに焦点を当てた気づきは、自らの保育のあり方を考える上で大事なことです。ぜひ、そうした気づきを文字記録として残していく（見える化する）よう、心がけてください。時系列に沿ってこどもの育ちの経過を考察したり、外面的な言動だけでなく、内面を読み取ったりすることによって、こどもの育ちを見る目、こどもの良さを発見する目を磨くことができると思います。さらに、注目したこどもと他のこどもとの関わり、集団でのこどもの立ち回り方（相互作用）との関連に考察を拡げてみてはいいかかでしょうか。

Q

三間の喪失に関することだと思いますが、ゲームやスマートフォンの動画などにより、自由遊びの際にずっとゾンビのようなものになりきって室内を歩き回り、他児と関わることや、何かの遊びを誘ってもしようとしません。私は、現在勤めている園にきて3か月ほどしか経っていませんが、以前いた園でも同じような子どもがいました。その子どもが今したい遊びは、なりきる遊びということかもしれませんが、ずっと怖い表情を続けているため、気になっています。そういった子どもには、どのように関わっていくのが良いのでしょうか。未満児にも以上児にもいます。それぞれの関わり方を教えていただけませんか。

A

好奇心や探究心を育むことをねらいとして、ゾンビを題材にした遊びやゲーム（ゾンビ鬼ごっこなど）を取り入れた保育実践も多くみられます。未満児段階では、ご指摘のようになりきり遊びを通して、基礎的な運動の動きづくりをねらいとした活動とみていいと思います。以上児段階では、個々のこどもが興味を持った遊び、動きを、他のこどもにも広めていってみんなで遊ぶ活動につなげていくという捉え方もできるのではないのでしょうか。

Q

私は、少人数保育園に勤務しており、3歳児の担任をしています。少人数の為、一人一人に手厚く関わられるのですが、個人差が大きく、取り組む活動や行事の際の内容が限られてしまいます。そのような活動の選択では、全員が達成できるようなものを選択する必要がありますでしょうか？また、達成できなくてもその過程を認めてあげたら良いのでしょうか？取り組むからには、全員目標を達成してほしいという気持ちが担任としてはあります。

A

勝敗・競争意識が高まってくる年中クラス以降は、縄跳び、鉄棒、跳び箱、ジャンプジム、竹馬、そして、上り棒などの遊具を使ったダイナミックな体の動きを楽しめることも現れます。こうした遊びに対して「上手な・できる自分でありたい」（理想の自分）という欲求・願望が強くなる一方で、もしかしたら、「下手・できないかもしれない」（現実の自分）という不安や葛藤との間で揺れ動きながら、前に進んでいこうとしています。したがって、積極的にチャレンジする時もあれば、尻込みしたり戸惑ったりする日もあります。子どもたちは、様々な力を直線的に獲得していくわけではありません。一見、後退しているように見える時、それは一度下がって次の段階に上がるためのエネルギーをためこんでいるのかもしれない。こうした、二つの自分の間を行きつ戻りつしながら前に進んでいくことが、幼児期の発達の特徴と言えます。その際、子どもの心（葛藤）を推察し、共感しながら励ますことが保育者には求められます。コロナ禍による行事の見直しの中で、「全員達成できるようなもの」を保育者が選択するだけでなく、子どもが「やりたい・やってみたい活動」を選択し、本番に向けて取り組んでいく保育実践が見られるようになってきました。「運動会で何やりたい？」「お母さん、お父さんに何見てもらいたい？」という投げかけから意見を出し合いながら、みんなで一緒にやりたいことを見つけていく、小規模保育園ならではの取り組みができるのではないのでしょうか。

■ 職員間の情報共有・連携

Q

同じ目標を持っていても、目線や視点を合わせるのが難しい場面があります。また、お互いの考え、捉え方にも違いが出た時等には、どうしても力関係が影響してしまい、納得できない気持ちのまま物事を進める事も多く出てしまいます。お互いの保育園をすり合わせる、お互いの目線を合わせる、考えを共有するために大切と思うことや、意識しなければいけないと考えることはありますか？

Q

保育計画を複数担任で作成しているのですが、共通理解しているようで出来ていない部分もあり、反省しています。どのようなことに気をつけながら、共通理解をしていけばいいのか知りたいです。

A

保育はチームでやるものだから、同僚ともしっかり話し合った方がいいということはみんな理解されていると思います。しかし、困りごとや疑問となると言いにくいし、相手が先輩だったり、言ったことを受け入れてもらえなかった経験があったりすると、「もう無理」になりがちです。さらに、子ども観や保育方法のズレは、「どっちが正しいか」で話すと傷つけ合いにならないとも限りません。したがって、「子どもにとっての最善は何か？」で話したらいかがでしょうか。それには、改善点を探りたいと思うきっかけは、子どもの姿の共有から始まります。子どもの姿から感じることを記録やメモにして、「ほんとだよ」と共有できることが始まります。それが一致して、「手立て」をともに打つことで、何より子どもが幸せになります。それをクラス毎でやれてもいいし、クラスで難しかったら、主任や他の職員に入ってもらってもいいと思います。一人で悩まずに話せる人に話す。そして、聞いてもらえない、言いにくいことも、一人で頑張るのではなく、みんなの課題にする、そういったスタンスを取られたらいかがでしょうか。

Q

学校法人の本部で事務職をしており、教職員の研修等を企画する立場にいます。若手保育者は、現場経験は浅いものの、「主体的な遊び」の重要性など、近年の保育の流れについて知識があります。一方で、ベテラン保育者は、現場経験が豊富な一方、一斉に行う保育や発表など、一昔前の保育の考えや方法から抜けきれず、ギャップを感じます。多忙な職場の中で、世代間ギャップを埋めながら、より良い保育環境をつくっていくために、どのような工夫が求められるでしょう。

A

ワークライフバランスが重視され、パワハラが問題になるなど、社会はどんどん変化しています。どんな時代を生きてきたかによって、考え方に違いがあるのは当然です。でも、そのギャップに苦手意識や嫌悪感を持たず、相手の目線・立場で考えること、そして、しっかりコミュニケーションを取ることが重要です。「園児の健全な成長を支える」といった保育士の根本は、昔もいまも変わりませんから、きっと共通の価値観を持てるはずですよ。

■ 幼保小の連携

Q

保育園は保育時間が長く、製作など時間制限をせず、一人一人が満足するまで時間や日にちをかけて完成させています。小学校になると、45分の授業の中で課題を終わらせないといけないと思うのですが、年長クラスになると、時間を意識したり時間がきたら終わらせるという風にしたほうが、小学校に行った際に戸惑いなどが無いのでしょうか？

A

保育所や幼稚園は、小学校の予備校ではありませんし、小学校の授業に役立てるために幼児教育があるわけでもありません。子どもの育ちの連続性を考えた時、幼保-小の接続は、次に困らないようにするための接続ではなく、今の育ち（幼児期の遊びの中の育ち）を次（小学校）も理解し、さらに伸ばすための接続ということになります。

幼児教育の3法令と同時期に、「小学校学習指導要領」が改訂されました。そこでは、小学校の指導形式に慣れない子どもがいるため、授業時間を分割（45分を15分に3分割）して児童を飽きさせないようにしたり、十分な活動時間を確保するために合科的な指導をしたりするなど、幼児教育のやり方を取り入れられつつあります。幼保、小の両者がその「段差」を埋めようとする試みだと言えます。したがって、幼保が小に合わせるのではなく、子どもが段差を感じることなく、育ちや学びにつなげていくことが大切だと思います。「小学校での学習になるべく早く適応するために」という価値観が優先し、子どもに対して、大人の思い通りになる「いい子」であることが求められているようにも思われます。思いっきり遊び込むことよりも、園での様々な習い事や行事の充実を要望する保護者の声が強いかも事実です。小学校の教室での学習や、学習に必要な学習規律の形成は、幼児期の身体と心を精一杯使って遊び込む中で育てられた知的好奇心や集団的な遊びや活動でのルールづくりなど、子どもの力を土台として行われる必要があります。

ベネッセ教育総合研究所の調査（2016）
https://benesse.jp/berd/up_images/research/20160830releasepaper_encyosa.pdf
 によれば、「遊び込む経験」（協同的な活動、自由に遊べる環境など）が多い子どもの方が「学びに向かう力」（強調性、好奇心、自己主張など）が高いことが示唆されています。家庭や保育所・幼稚園での生活の中で、私たち大人は、子どもたちを「いい子」にしようという思いのあまり、「汚しちゃダメ!」「危ない!」「うるさい!」「早く!」「下手ねえ・・・」と「禁止」や「抑制」を強いてしまいがちです。「抑制」を強いるのではなく、身体感覚を伴って複合的に実感できる遊びを、じっくり、たっぷり積み重ねていくことが重要です。

Q

卒園した児童について、気になる時に小学校へ保育園側から問い合わせることは可能ですか？また、1年生の担任が理解が浅い、こちらの意図が伝わらない場合、担任以外の教員に相談することはできますか？

A

可能です。まずは、園長から小学校長へ問合せの概要（意図など）を伝え、その後、当該児の状況を把握している担任教諭とのやり取りをするという段取りを取られたらいいと思います。

Q

積極的に交流を持ちたいですが、交流の機会をもてるのは年に数回です。勤務時間内に仕事が終わるかどうかの状況で、小学校の先生も同じなのでは？と思います。日々の業務に加え、計画、企画、交流されている園は、どのように工夫されて時間を捻出されているのか知りたいです。

A

ご指摘のように、事前打合せや日程調整など、連携に係る時間の確保は、幼保、小学校双方にとって悩ましい問題です。連携を密にすればするほど、双方に負担を強いることとなります。幼保-小の交流を深めることは大切ですが、すべての保育者が交流までのプロセスに参画するには無理があります。したがって、園長、主任、そして連携担当保育士などを中心とした、企画チームが、事前の調整、企画立案を進め、事前研修を経て、交流に臨むといった流れをつくるのが大切だと思います。小学校との連携を実質化するためには、人員配置、ノンコンタクトタイム（勤務時間内に子どもたちと関わらない時間）の導入など、気持ちや体をリセットする職場環境をつくることも大切だと思います。

Q

小規模園でいろいろなところへ受験する家庭が多い場合、小学校との連携が難しい（保育要録のみ）ですが、県外では何か取り組みをしているのか。

A

個別対応で、小学校との連携を考えるのが現実的だと思います。保育要録の送付に際し、当該児の育ちの状況について、補足説明の場を確保することに努めてはいかがでしょうか。ベネッセ教育総合研究所の調査（第3回幼児教育・保育についての基本調査、2019）によれば、公立保育所・幼稚園に比べ、私立の方が「内容について補足説明する場がない」と回答した割合が高いという結果が出ています。しかし、7割くらいの園では、そうした場が用意されています。当該児の最善の利益という観点から、そうした場について小学校との連携を図ってもらえればと思います。

Q

現在、入学前の連絡会以外、ほとんど小学校との交流はない状態です。お散歩で小学校の周りを歩いたりすることはありますが、小学校に遊びへ行ったり、校内を見て回ったりする機会を作りたいです。学校によって対応が様々なようで、なかなかすることができません。まずは、何から始めたらいいでしょうか。

A

「保育所や幼稚園等と小学校における連携事例集」（文部科学省・厚生労働省：2009）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1258039.htm
 によれば、実際に教職員の交流の場を設け、互いの参観や研修などが行われている都道府県もあります。身近な地域で開催されている、定期的な交流会や研修会、園児の小学校見学について、市町村の教育委員会に問い合わせることはいいかもしれません。

Q

幼保－小との連携の場について、なかなか機会が持てないのが現状だと思うのですが、具体的にどういった取り組みが全国でされているのか、もう少し詳しく知りたいです。

Q

年長担任を3年間しています。幼保小連携の話し合い、研修にも何度か行っていますが、なかなか見学くらしいか実行できていません。みなさん、どのくらいの交流活動をできているのでしょうか。また、どのようなことをしているのか具体的に時期なども知りたいです。

A

第4回幼児教育・保育についての基本調査（ベネッセ教育総合研究所：2024）

https://benesse.jp/berd/jisedai/research/pdf/240708-1_03.pdf

によれば、小学校との協働・連携を実施している園は、公・私立、幼稚園・保育所・こども園のいずれも、2018年調査よりも増えています。また、その内容を見ると、こども間だけでなく、教職員間の交流へ、単発のイベントから日常的な取り組みへと、質の深まりがうかがえます。交流活動の概要については、この調査結果や文部科学省が毎年実施している「幼児教育実態調査」を参照してください。